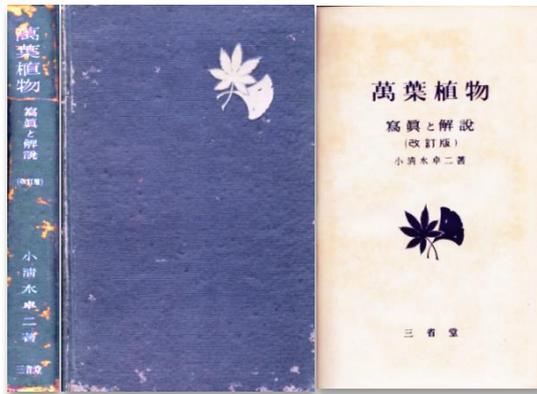




# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第36号

(2015年9月)



「…万葉植物考察に当り特に感ずる事は、我が国往古の人の自然界の観察力が実に鋭敏にして、且つ当を得ていた事である。現今植物生理、生態、分類学的方面から重要視されている事項、現象の一部分を、吾が祖先は既に今より千三四百年以前に於てよく観識していた事を今更驚くのである。」

『万葉植物 写真と解説』より(表紙と背、扉。詳細は4頁から)

北光クラブ  
自然観察クラブ 鹿沼



## 氾濫黒川探検

9月9日から10日にかけての大雨は未曾有の災害となりました。被災された皆様に、改めてお見舞い申し上げます。

自然はこのような災害をもたらす一方で、豊かな恵みを地球上の生物に与えてくれます。大雨・洪水は時に人の命を奪い、田畑を荒らし、人々を絶望のどん底に追いやることもあります。その一方、かつて洪水は農民に肥沃な土地をもたらしたといえます。雨や川は、もともと私たちが生きて行く上でなくてはならないもの。そして時に起こる大雨や洪水も、ある面においては、人が生きて行く上で必要な自然現象であるといえるのだと思います。

橋脚を流してしまう濁流は大きな石をも浮かせ、砂や泥を流し、石に付いたヌル(川海苔)を洗い、時に河原に生えたヨシなどの植物を根こそぎ洗い流し、美しい玉石の広がる河原の風景を取り戻すことがあります。さらに水もきれいになり、魚類その他、生息する生き物の種類が変わることも考えられます。

自然観察クラブはこの1年、黒川の自然に注目していきたいと思います。前回、9月と同様、北赤塚十文字より壬生町に入り、黒川橋より車に乗って黒川を遡ってみます。

日時:10月12日(休) AM8:00 北小西門集合(解散はPM1:00頃)

行程:黒川橋(壬生町)——新田橋跡——(東北道黒川橋)——楡木橋——  
大和田橋——瀬戸川合流地点——楡木堰分水地点——黒川橋——  
新上殿橋——上殿橋——柿内堰(新堀)分水地点——さつき大橋——  
木島堀合流地点——西武子川合流地点——貝島橋——朝日橋——  
ふれあい橋跡——府中橋——睦橋跡——御成橋(木島堀分水地点)

持ち物:長靴があると安心です。

参加費:ガソリン代としておとな300円、子ども150円

保険料(年間)1,300円



下武子を流れる  
西武子川にて



## 奥日光、茶ノ木平～半月山ハイキング

紅葉が見頃と思われる奥日光に出かけ、中宮祠から茶ノ木平、半月山に登って展望を楽しみましょう。天気良ければ中禅寺湖や戦場ヶ原から、日光最奥の山々の展望が期待できます。湯滝、竜頭の滝、そして赤岩滝はここから見えるのでしょうか。できれば阿世瀉まで足を延ばして湖畔を歩き、水鳥や巨樹の観察などしながら中宮祠に戻ります。

途中、輪王寺別院、中禅寺に参詣し、木造千手観音立像(立木観音・国重文)および四天王像をまつる本堂など見学しましょう。

日 時:10月18日(日)AM5:00北小西門集合

行 程:鹿沼(北小)5:10——土沢IC——清滝IC——ファミリーマート5:50——

中宮祠(日光自然博物館<sup>®</sup>)(60分)……茶ノ木平(40分)……

中禅寺湖スカイライン(30分)……狸山(15分)……駐車場(50分)……

半月山(25分)……半月峠(40分)……阿世瀉峠(20分)……阿世瀉

(20分)……狸窪(40分)……立木観音(20分)……中宮祠——鹿沼

服 装:防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物:リュックサック、水筒(ポット)、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、

ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて:ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、スパッツ、熊鈴、ザックカバー、

参考書(栃木の山150、栃木県の歴史散歩)、

1/25,000 地形図は「中禅寺湖」「日光南部」

参加費:ガソリン代として おとな700円、子ども350円 保険料(年間)1,300円

共に問合せ&申込み:電話090-1884-3774(自然観察クラブ・阿部)



社山方面から見た中禅寺湖

小清水卓二『万葉植物 写真と解説』

(昭和17年5月30日・三省堂発行)

序

万葉集は実に我が祖先の高邁にして且つ純真な民族的思想感激をあらわすと同時に、更に一面に於て吾が国往古に於ける自然界の理科的観察を率直に詞華に織り交ぜた、我が国古代文化の各方面を万世に伝える宝庫である。

此の宝庫に蔵された心の跡を各方面より、よりよく闡明する為めに従来各部専門的分野から夫々貴重な研究が遂行されている。就中春花秋葉の植物学的分野の研究も少なく、且つその功績も挙っているものがあるが、然し植物を能する者は概して歌を能せず、又歌を能する者は概して植物を能せぬ場合が多く、従って植物の考証にも異説異論の種が絶えない。

著者は浅学菲才特に歌を能せぬ者であるが、万葉人の心の故郷、奈良の地に住み馴れた関係上此の種の問題に触れる機会が多く、且つ此の方面の植物の分布、生態、応用、異名、漢名、渡来等の研究に地の利を得、又皇紀二千六百年の記念事業の一つとして万葉植物標品作製に参与している関係上、万葉植物の再考証をなす機会を得た。勿論万葉植物中には単に漠然と総称名で諷詠されていて寧ろ一種の植物に限定するのが妥当でない場合もないではないが、然しその反面には一見総称名に見えてもその実、歌詞の前後の意味から明らかに或程度まで種類を限定する事が出来る場合もある。

例えば「み芳野の青根が峰の蘿つたむしろ誰か織りけむ経緯無しに」の蘿の如きは、従来各地の陰湿地に生ずる「せにごけ」「すぎごけ」或は樹幹上の「うめのきごけ」等所謂「ごけ」と称する植物の総称とする説があるが、然し歌詞中の誰か織りけむ経緯無しにとか、芳野の青根が峰等から考察すると、吉野地方の深山幽谷の樹木や岩石等に附着して縦糸とも横糸ともつかず、而も筵の様な形態で垂れている「みやまさるおがせ」の如き蘿が最もよく当嵌った植物であり、この植物でこそ始めて吉野山の幽邃さが眼前に髣髴として来る様に思われるが如きがその一例である。

又万葉植物考察に当り特に感ずる事は、我が国往古の人の自然界の観察力が実に鋭敏にして、且つ当を得ていた事である。現今植物生理、生態、分類学的方面から重要視されている事項、現象の一部分を、吾が祖先は既に今より千三四百年以前に於てよく観識していた事を今更驚くのである。

例えば「ねむのき(ねぶ)」の睡眠運動、「このてがしわ」の指向性、蓮の葉の蒸散作用、花の開花時間や日照関係、「すみれ類」の細別、或は兎角見落とし易き種子類の色、特に「いちはつ(ぬばたま)」の種子の色に至るまでよく観察の行届いた事等がその一例である。

更に又注意すべき事は諷詠されている植物の大部分が薬用、染料、食用其他人生に極めて関係深き有用植物である事である。単に美花を讃えるのみであれば歌中に出づる植物以外にもっと美しい野生植物が当時多数手近に求め得られた筈である。然るに花も葉も共に観賞的価値に乏しき「おけら(うけら)」、「こうやぼうき(たまはき)」、「くろくわい(ゑぐ)」、「よもぎ」、「むらさき」、「あかね」等の如き植物が選ばれているのは寧ろ奇異に感ぜられるが、これは結局これ等の植物が夫々薬用、食用、染料等に供せられる関係上、常々人生に極めて縁故深く、親しみを持たれ、一面本草方面の大陸文化をよく消化し、日常生活に活用していた為めと考察せられる。

特に羊齒類中には人目につき易く美しい観賞的形態を有するものが沢山あるにも拘らず、特に「はこねそう(こくさ)」、「のきしのぶ(したくさ)」、「わらび」等の如き薬用、或は食用羊齒類のみが詠われているのを見ると一層此の感を強くする。

今参考のため万葉集に出てくる156種の植物を、分類、応用、原産地等の方面から見ると次の如く分類することが出来る。

#### 一. 分類上から見ると

双子葉植物	101種
単子葉植物	34種
裸子植物	9種
羊齒植物	5種
真菌類	1種
地衣類	1種
紅藻類	1種



褐藻類	2種
緑藻類	1種
藍藻類	1種

二. 応用上から見ると(156種なるも兼用のものは重複して加算)

薬用植物	61種
染料植物	13種
食料植物	81種
繊維植物	4種
木材植物	22種
観賞用植物	35種
細工用其他の用のある植物	35種
著しき用途なき植物	8種



(此の類は形態上特異性を示すものが多い。例えば「おもいぐさ」、「やどりぎ(ほよ)」の如し)

三. 原産地上から見ると

在来野生植物	131種
在来栽培植物	6種
外来植物	19種

紙面の関係上説明を出来得る限り簡単にし、且つ考証理由も省略したが、然し異説植物名は忠実に添書し、以て大方諸賢の御批正と御教示とを仰ぐ事にした。

尚お此の稿を終るに当り、牧野先生からは特に親しく御高説と御注意とを承わりたる事、又竹内博士、岩城準太郎氏、木枝増一氏、川島武氏等には種々御援助に預った事、又隅山佳哉氏、小川晴陽氏、松山志郎氏等の努力によって出来るだけ明瞭な写真を挿入する事が出来た事、又出版に当っては三省堂亀井氏の御厚意と、同書店松本進氏、伊藤喬氏等に一方ならざる御尽力を蒙った事等を茲に深く感謝する次第である。

皇紀2600年の佳き年10月

聖地奈良に於て

著者しるす

## はぎ

- 〔万葉呼名〕 はぎ(波疑・波義・芽・芽子・芽之)  
 〔通称名及別名〕 やまはぎ(はぎ)  
 〔科名〕 荳(まめ)科  
 〔学名〕 *Lespedeza bicolor* var. *japonica* Nakai  
 〔漢名〕 (萩)・又牙子・木萩・胡枝子・鹿鳴草・天竺花・胡枝花(誤用)



- 〔産地〕 北海道・本州・四国・九州・台湾  
 〔集解〕 関西地方の山野に通常よく見る野生の萩で花も花序も比較的大きく枝の数は少ない。葉は長楕円形である。秋の初めに紫色の花がつく。葉茎は若い時に食用に供す。「はぎ」は生芽の意。

### 〔万葉歌詞〕

丈夫の呼び立てしかばさを鹿の胸分け行かむ秋野萩原(4320) 大伴家持

ますらおの よびたてしかば さおしかの むなわけゆかむ あきのはぎはら  
 麻須良男乃 欲妣多天思加婆 左乎之加能 牟奈和氣由可牟 安伎野波疑波良

(※ ほかに 127 首の番号が紹介されているが省略させていただきました)

## すすき

- 〔万葉呼名〕 すすき(須々伎・須々吉・須為寸・須酒伎・為々寸・為酢木)  
 〔通称名及別名〕 すすき(かや・そでなみぐさ・つきなみぐさ・つゆぐさ・てきりがや・みくさ・みだれぐさ・をばな・はたすすき・はなすすき)  
 〔科名〕 禾本(かほん)科  
 〔学名〕 *Miscanthus sinensis* Anders.  
 〔漢名〕 芒(日)(本)(詩)(牧)・八王草・鷄爪・芭芒・芭茅・薄



- 〔産地〕 北海道・本州・四国・九州・琉球・台湾  
 〔集解〕 山地や原野に自生する宿根草で、葉は細長く剛硬である。秋の頃所謂尾花と称する穂が出る。根茎は薬用に供す。稈(わら)は屋根を葺くに用いる。「すすき」は立ちたる草或は「すすの木」の意。

### 〔万葉歌詞〕

婦負の野の薄(すすき)押し靡べ降る雪に宿借る今日し悲しく思ほゆ(4016)

高市黒人(越中)

めいののの すすきおしなべ ふるゆきに  
 売比能野能 須々吉於之奈倍 布流由伎爾  
 やどかるけふ(きょう)し かなしくおもほゆ  
 夜度加流家敷之 可奈之久於毛倍遊

(※ ほかに 32 首)

## くず

〔万葉呼名〕 くず(久受・田葛・真葛・葛)  
 〔通称名及別名〕 くず(くぞ・まくず・かつね・いのこのかね)

〔科名〕 荳(まめ)科

〔学名〕 *Pueraria Thunbergiana* var. **typical Honda**

〔漢名〕 葛(日)(本)(H.F.)(BR.)(植)(詩経)(牧)・土瓜・走根梅・締絡草・葛藤(H.C.)(G.)(H.N.)(P.L.)・麴葛・黄斤・鹿藿・齐根・葛花(H.F.)・葛根(救)(台)

〔産地〕 北海道・本州・四国・九州・琉球・台湾

〔集解〕 山野によく見る大きな蔓植物で、葉は三つの小葉から成り、夏の頃豆の花の形をした紫色の花が穂状に沢山つく。果実は大豆の果質に似ている。塊根は葛粉を採るに用い、又薬用にも供する。嫩葉(わかば)は食用になる。「くず」は大和国栖より来ると。

〔万葉歌詞〕

雁がねの寒く鳴きしゆ水茎の岡の葛葉は色づきにけり(2208)

かりがねの さむなきしゆ みずきの おかのくずはは いろづきにけり  
 雁鳴之 寒鳴従 水茎之 岡乃葛葉者 色付爾来

(※ ほかに 16 首)



## なでしこ

〔万葉呼名〕 なでしこ(奈泥之故・奈豆之故・那泥之古・牛麦・石竹・瞿麦)

〔通称名及別名〕 かわらなでしこ(なでしこ・からなでしこ・せきちく・ちゃせんばな・ちちこぐさ・とこなつ・とまりくさ・なつかみぐさ・のなでしこ・ひくれぐさ・やまとなでしこ)

〔科名〕 石竹(なでしこ)科

〔学名〕 *Dianthus superbis* var. **longicalycina Williams**

〔漢名〕 瞿麦(誤用)(本)(G.)(BR.)(植)・天菊・句麦・地麴・錦竹・聖龍・鬆・繡竹

〔産地〕 樺太・北海道・本州・四国・九州・琉球・台湾

〔集解〕 山野に自生する宿根草で、細長い葉が節々に対生し、秋の初めに可憐な淡紅色の五弁の花を開く。秋の七草の一つで、種子は薬用に供し、茎葉は食べられる。「なでしこ」は可憐な花容により撫子の意。

〔万葉歌詞〕

野辺見れば瞿麦(なでしこ)の花咲きにけり吾が待つ秋は近づらしも(1972)

のべみれば なでしこのはな さきにけり わがまつあきは ちかづくらしも  
 野辺見者 瞿麦之花 咲家里 吾待秋者 近就良思母

(※ ほかに 25 首)



## お(を)みなえし



- 〔万葉呼名〕 おみなえし(娘子部四・姫押・娘部思・姫部志・佳人部為・美人部師・乎美奈敷之)
- 〔通称名及別名〕 おみなえし(あわばな・おもいぐさ・このでがしわ・ちめぐさ・めめぐさ・おみなかし・おみなべし・おみなめし)
- 〔科名〕 敗醬(おみなえし)科
- 〔学名〕 *Patrinia scabiosaefolia* Link
- 〔漢名〕 (女郎花)・苦芥菜・敗醬(本)(G)(日)・墓頭回・菊花女・馬草(本)・黄花龍芽(植)(牧)
- 〔産地〕 樺太・千島・北海道・本州・四国・九州・台湾
- 〔集解〕 山野に自生する多年生宿根草本で対生の羽状裂片葉を有し、秋の頃茎の頂に小形黄色の花を傘状につける。花には特殊な臭気がある。秋の七草の一つで葉は食用にし、根は薬用に供する。

### 〔万葉歌詞〕

手に取れば袖さえ匂う女郎花この白露に散らまく惜しも(2115)

てにとれば そでさえにおう おみなえし このしらつゆに ちらまくおしも  
手取者 袖井丹覆 美人部師 此白露爾 散巻惜

(※ ほかに8首)

## ふじばかま

- 〔万葉呼名〕 ふじばかま(藤袴)
- 〔通称名及別名〕 ふじばかま(あららぎ・らん)
- 〔科名〕 菊科
- 〔学名〕 *Eupatorium japonicum* Thunb.
- 〔漢名〕 蘭草(本)(植)(日)(牧)・不老草・佩蘭葉・秋蘭・省頭香・辟汗香・醒頭香・醒頭草・嬾昂児
- 〔産地〕 本州・四国
- 〔集解〕 山野に自生する宿根草で、高さ1米内外に達し、茎葉に香気を具えている。通常茎の下部には3深裂した葉が対生している。淡紫色で「あざみ」の花に似た小さい花が、茎の頂に叢生する。秋の七草の一つで、薬用に供せられる。



### 〔万葉歌詞〕

萩が花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝貌の花(1538) 山上憶良

はぎがはな おばなくずばな なでしこのはな おみなえし またふじばかま あさがおのはな  
芽之花 乎花葛花 瞿麦之花 姫部志 又藤袴 朝貌之花



←今日の一般的な  
「秋の七草」

## あさがお

〔万葉呼名〕 あさがお(阿佐加保・安佐我保・朝貌・朝杲・  
槿)

〔通称名及別名〕 おくげ(はちす・あさがお・かきつばたき・きは  
ち・もつき・ゆうかげぐさ・ほこ)(貝原益軒・賀茂真淵・鹿持  
雅澄・加藤千蔭)

〔科名〕 錦葵(あおい)科

〔学名〕 *Hibiscus syriacus* L.

〔漢名〕 木槿花(本)・槿花(日)(本)(W.)(G.)(H.C.)  
(植)(牧)・茶花(H.C.)(G.)・舜(G.)(詩経)・葭(G.)・椴(G.)・朝  
生・紅木槿花(D.)・朝革・朝菌・日給之花・舜(G.)・莫・木  
槿樹(救)・麗木・暮落・裏梅花・茶金條(H.C.)(G.)・牛不  
木矣・赤槿(潜確類書・時客・無窮花木)

〔産地〕 栽植(原産・印度)

〔集解〕 落葉灌木で、夏から秋にかけて梢の頂に「あおい」に似た大きな花が通  
常早朝開く。花の色には淡紫・淡紅・白色等がある。墓地や、籬植として所々に見  
られる。観賞用にす他、白花を薬用にし、嫩葉は食用に供する。「おくげ」は木槿  
の音。

〔万葉歌詞〕

朝顔は朝露負いて咲くと云えど夕陰にこそ咲きまさりけれ(2104)

あさがおは あさつゆおいて さくといえど ゆうかげにこそ さきまさりけれ  
朝 杲 朝 露 負 咲 雖 云 暮 陰 社 咲 益 家 礼

(※ ほかに4首)

〔異説植物名〕 あさがお 旋花(ひるがお)科(伴信友)・ききょう 桔梗(ききょう)科(藤井  
高尚・鴻巣盛広)・ひるがお 旋花(ひるがお)科(狩谷掖齋)



## 〔漢名〕 出所凡例

(日)本邦本草家／(本)本草綱目／(詩)詩経／(牧)牧野日本植物図鑑 1941

／(植)植物名実図考／(救)救荒本草／(台)台湾植物目録 1910

(BR.)Bretschneider,E.—Botanicom sinicum.1881-1895

(D.)Diels,L.—Die Flora von Central-China.1901

(G.)Giles,H.A.—A Chinese-English Dictionary.1892

(H.C.)Henry,Aug.—Chinese names of plants.1888

(H.F.)Henry,Aug.—A list of plants from Formosa with some preliminary remarks on the  
geography,nature of the flora and economic botany of the island.1896

(H.N.)Notes on economic botany of China.1893

(P.L.)Plantæ Wilsonianæ.1901-1914

(W.)Williams,S.W.—A syllabic dictionary of the chinese language.1903

## 小清水卓二・人物紹介と主要著書

### 小清水卓二先生の思い出

小清水先生は、奈良女子大学と帝塚山大学の名誉教授である。2つの大学を兼任するのは異例であるが、この他、奈良大学や奈良教育大学でも教鞭をとられていた。そのためなのか、特別なはからいなのか、私もよく誘ってくださり、先生の専門の植物解剖学・生理学・病理学をいささか学ぶことができた。



先生は奈良県の各市町村の市史などの植物調査もされていて、同行する機会があった。他の先生に「この君は、湿生植物に詳しい」と紹介された。そして、私にも調査結果を書いてほしいと言われた。けれども、私は何の肩書もないので、お断りした。今思うに、肩書など植物研究家でも何でもよかったことだ。

関西自然科学研究会では、会員が来ると、山高帽を少し上げてあいさつされていた。先がとがった金具が付いたステッキで「カチン、カチン」とついて歩かれる姿は貫禄があった。体力がおちてきたと思ったとき、いつまでもお元気で活躍して下さい、という「いや、それは自然の法則に反する」と答えられた。

先生の研究は数多い。ハマオモトの自然分布を示すハマオモト線がある。このほか、私の心に残っているものは、花が短いソメイヨシノの一件である。花期がもっと長ければ、花見が混雑することはないだろうと、開花ホルモンを調節して、開花を1週間おくらせることに成功されたのである。

(山口龍治)

※ 小清水卓二博士の略歴については、「愛弟子」山口龍治氏がお寄せ下さったものに多少加筆（小文字部分）して、紹介させていただきます。

### 理学博士 小清水卓二先生 略歴

1897年(明治30年)6月15日 神奈川県足柄上郡中井町井ノ口生れ

1923年(大正12年)3月 東京高等師範学校卒業

秋田県立本荘中学校で教諭となる。教職を勤める傍ら東北帝国大学にてハンス・モーリッシュ教授から植物学の指導を受ける。

1927年(昭和2年)3月 京都帝国大学理学部植物学科卒業

同大学院にて植物生理生態学者郡場寛に師事。

1930年京都府女子師範学校教授に就任。1932年奈良女子高等師範学校教

(次ページへ続く)

授、1949年より奈良女子大学教授(植物学教室、理学部学部長)。1964年より帝塚山大学教授(教養学部学部長、学長代理)。専門は、植物生理生態学。万葉集に詠まれた植物である「万葉植物」や奈良・大和地方の天然記念物等に関する生態学的研究や、正倉院の御物や古代遺跡からの出土物についての植物学的調査などを行う。

1943年(昭和18年)10月 関西自然科学研究会理事に就任

1951年(昭和26年)4月5日 「子実の生理生態学的研究」で京都大学より理学博士の学位を受ける

1965年(昭和40年)3月 関西自然科学研究会会長に就任

1970年(昭和45年)4月29日 勲三等瑞宝章を受ける

1980年(昭和55年)10月24日 逝去、83歳、正四位に追位される

〔役職〕 奈良女子大学名誉教授・帝塚山大学名誉教授・関西自然科学研究会会長のほかに、奈良県文化財保護審議会委員・奈良県古都風致審議会委員・奈良県自然環境保全審議会委員・奈良市編集審議会委員・奈良国際文化観光都市建設審議会委員・奈良植物研究会会長・奈良県立橿原考古学研究所員・日本自然保護協会評議員・奈良県文化財専門審議会会長・奈良県教育委員会委員・奈良県史跡名勝天然記念物調査会委員・藤原宮趾伝説地調査委員・奈良県公園整備対策委員会委員・紀ノ川上流地域自然環境調査委員長・春日大社原生林調査委員長 等を歴任。

〔受賞〕 勲三等瑞宝章・奈良県文化賞・国立公園功労賞・文化財保存功労賞・市政有功者

〔主な著書〕

万葉植物 写真と解説(三省堂、昭和16年)

大和の名勝と天然記念物(天理時報社、昭和18年)

植物生長ホルモン(續文堂、昭和19年)

万葉植物と古代人の科学性(時事新報社、昭和20年)

奈良の自然(共著)(六月社、昭和40年)

万葉の草・木・花(朝日新聞社、昭和45年)

花の大和路(共著)(朝日新聞社、昭和46年)

母と子のための奈良県の植物(共著)

(大和タイムズ社(現・奈良新聞社)、昭和50年)

※ 23頁から  
小清水博士に薫陶を受けた山口さんの「自然講座」一挙3編を掲載しています。

小清水卓二先生がお亡くなりになったおりに寄せられた、関西自然科学研究会すべての先生方の声を紹介したいが、紙面に限りがあるので、上野先生の言葉のみ要約してお伝えします。 (山口龍治)

京都大学名誉教授・理学博士 上野益三(動物学)

小清水君と僕の交友の始まりは、1924年(大正13年)の昔にさかのぼる。僕が、京都帝国大学理学部動物学科の2年生のとき、1つ年長の小清水君が1年おくれで植物学科に入った。両学科は同じ建物だったので同君とはしばしば顔を合わすことになった。しかし、寝食をともにして、同君の人柄に接することになったのは、その年の夏のことである。植物学科が伯耆大山(ほうきだいせん・島根県)へ野外実習旅行を催し、同君も僕もそれに参加したときからである。同君が関西自然科学研究会に行かれるとき、僕もたびたび参加した。小枝を手にした中年婦人が、会長に「先生、これは何でございましょうか」と問いかける。「それはアセビ。アシビとも言います。純白の花は早春に咲き始め、5月ごろまで続く。花期が終わる7~8月ごろには、もう翌春咲く花穂が伸びかけます。はい、あなたが手にしているのは、ちょうどその状態のものです。葉などに有毒成分が含まれていて、シカは食べないからよく育っています。アセビは馬酔木(ばすいぼく)といって、馬が食べるとフラフラになるからです」とみなを笑わせる。話は一転して、「万葉集の中には、アセビを詠んだ歌が20首もあるのに「古今集」からのちになると、なぜかアセビが歌に取り上げられない」謹厳そのもののような顔付でも時々ジョークをとばされていた。

小清水会長は、存在することによって取りまく会員たちに、親愛の情と感動を与える自ら備わった人徳があった。人そのものの存在の魅力とでも言えよう。同君は、分類学者ではないが、奈良県下の植物の一つ一つについての造詣は、全く他の追隨を許さぬ深いものであった。僕が植物学者としての同君を畏敬し、惜しんでやまないのはこのためである。



上野益三博士

## 日光・霧降隠れ三滝と大山ハイキング

8月2日（日） 天気・晴れのち荒天

### 《旅の記録》

鹿沼 6:10——土沢 IC——日光 IC——霧降滝入口バス停①（標高 750m）7:20……霧降滝  
7:50……丸太橋 9:00……丁字（ちょうじ）滝 10:00……玉簾（たますだれ）滝 10:25……  
マツクラ滝 11:00（昼食）……コンクリート橋……隠れ三滝バス停……霧降滝入口バス①—  
—チロリン村 13:40——日光 IC（セブソリア）——土沢 IC——鹿沼

猛暑が続く夏も8月に入り、水のある風景に涼を求めて霧降の隠れ三滝を訪ねる山行を企画、俄かのことで参加者も内輪の3名にとどまりましたが、なかなか記憶に残る1日となりました。



霧降ノ滝

朝6時に鹿沼を出発、朝日が早くも照りつける霧降つつじヶ丘の駐車場には一番乗りで車を止め、まず近くの霧降ノ滝へ。観瀑台からの谷を隔てた滝の風景はまさに絶景。エゾゼミのギイギイという声が湧き上がる緑の中の滝を眺めながら、秋の紅葉時、多種の落葉樹が織りなす紅葉のモザイク模様彩られた滝の姿を想像します。

つつじヶ丘に戻り、三滝を経て大山を目指すハイキングコースに入ります。

先ほど遥かに見えた滝の上流部を初めに、森の中の渓流を幾度か渡渉しながら登って行き、水辺、道端に珍しい植物はないかと目を光らせます。最近の豪雨などで道が荒れたり切れたりしている恐れもありましたが、次第に頻繁に他のグループと行

き会い、意外に通う人の多い道なのだわかります。にしても、渓流に渡された丸太の橋など、介助なしにはおっかない箇所も度々。夏休みらしく子ども会のキャンプのような団体も多く、冒険を楽しんでいる様子でした。丁字滝、玉簾滝、マツクラ滝と、それぞれ特徴のある滝を経めぐり、水辺に降りる度、ひんやりした空気を楽しめます。最後のマツクラ滝で、賑わう他



霧降滝の上流を  
時々川を渡りながら登って行く

団体に混じって我々も昼食。空模様を見、疲れてもいたので、この後は引き返すことにしました。

川から上がって林道を歩き、車に戻ってチロリン村へ寄り道、人気の日光天然氷のかき氷を味わいます。「25分」という待ち時間の間に、テラスの外は激しい雨になり、雨とかき氷で涼しさ倍増。食べ終わる頃雨も小降りになり、小走りに車に戻って帰路に就きます。雨はすぐ止み、霧降のさびれた別荘街を車窓に眺めながら、日光市街を通りぬけて高速道路へ。遠くに稲妻の直下降が見えていました。



マツクラ滝

さてそれからが大変。コンビニで小休止してから入った高速道路上で、雨が本降り、やがて土砂降りに。洗車機の中はこうかと思うような、バケツで水を注がれているような雨で視界も利かず、もちろん50キロ規制ですが、40キロでノロノロ運転、周囲には路側帯に止まってしまった車も多数見られました。やっと高速を降りると、後で聞かぬにこの土沢から板橋、文挾あたりというのが被害が大きかったそうなのですが、突風、豪雨、落雷、雹により、沿道は停電で信号もコンビニも真っ暗、杉並木は落ち枝や倒木で通行止め、というその只中を、休み休みと最徐行と蛇行と迂回で切り抜けて帰って来たのです。が、着いて見れば鹿沼の街は、遠雷轟くものの雨も降らず、風が涼しくなただけで全く平静そのものでした。この局地的大嵐は全国ニュースで報じられ、翌日の下野新聞のトップでも取り上げられていました。

## ※ 参加者

小島美穂、阿部良司・みゆき（計3名）

## ※ 見た植物

（咲いていた植物）ウマノアシガタ、コケイラン、

コバギボウシ、ソバナ、タマアジサイ、ノリウツギ、フシグロセンノウ、ボタンズル、ミヤマカラマツ、ヤマハギ、レンゲショウマ（写真久、左は花のあと）

（目についた落葉広葉樹）アカヤシオ、アワブキ、イヌブナ、ウラジロノキ、エゴノキ、オオヤマザクラ、クリ、コアジサイ、コハクウンボク、コナラ、サラサドウダン、サワグルミ、ナツツバキ、ネジキ、フサザクラ、ミズキ、ミズナラ、ヤシャブシ、ヤマウルシ、ヤマツツジ、ヤマハギ



※ 見た・聞こえた鳥

ウグイス、ヒヨドリ、ホトトギス

※ 霧降三滝めぐりの風景



霧降ノ滝バス停近くの駐車場



三滝を経て大山までの親切な案内板があった



水辺には水の神様  
弁財天をまつる  
マツクラ滝入口付近で



丁字滝



玉簾滝



賑わうちロリン村  
日光天然氷のかき氷を提供している



マツクラ滝を滝壺（右）に向かって少し上る  
河原（左）は夏休みの子どもの団体が賑わっている  
（湾曲して見えるが実際はほぼまっすぐです）

※ 霧降三滝植物図鑑



センニンソウ



タマガワホトトギス



ツルガシワ



コゲイラン



キヌタソウ



イワタバコ



フシグロセンノウ



ソバナ



メタカラコウ



クサアジサイ



イケマ



クサギ



ササの葉の点線は筒状の新芽の時の虫の仕業



マツカゼソウの葉



サワシバ (実)



リョウブ



←タマアジサイ、つぼみがまん丸(玉)でユニーク!



天然のナメコ



タマゴタケ (中・右)、ドキッとしますが食用と



北光クラブ・サマースクール  
水の生き物観察  
8月9日（日） 天気・

夏休みも半ばを過ぎましたが相変わらず猛暑が続く日曜日の朝、川での水遊びも兼ねた魚とりで涼と収穫を期待して集まった親子9組 17 名にスタッフ 4 名、車 4 台とトラック 1 台に荷物共々分乗して半日市内周辺をめぐるしました。ギーコン釣りを希望する声もあったのですが、黒川は度々の雨で水が多く危険と見て断念、主催者側で下見したポイント 4 か所を回って、いろいろなタイプの「漁場」を体験しました。

まずは玉田町の田んぼの中の用水路、さっそく膝まで浸かって網を振ります。フナ、ドジョウ、ザリガニ、コオニヤンマの幼虫などがいました。次いで日光市岩崎、「昆虫観察」でもお世話になった岡崎さん方の用水路は、段差が大きく、「隊長」が入って捕って見せるつもりでしたが、興に乗った高学年の子も飛び降りて冷たい水に悲鳴を上げながら、早速網を振っていました。鮮やかな婚姻色のカワムツが捕れました。ここではついでに雑木林に入って虫捕りも。あっという間にカブトムシが 10 匹くらい捕れました。その後ちょっと足を延ばして板荷へ、せせらぎプール脇の黒川本流で、溪流さながらの流れに網を入れます。流れが急でバケツ 1 個、網 1 本を流されただけで、大した収穫はありませんでしたが、川遊びの気分は満喫できました。さらに同じ板荷の田んぼをめぐる吉良堀の一角で、水路を延々と辿りながら、スナヤツメ、ウグイなどの魚や水生昆虫などを集めます。

魚は水温に敏感で、連れ帰って飼うのは難しいものが多いようです。ザリガニはその点子どもたちには人気、トンボのヤゴばかりでない水生昆虫も、いろいろな種類がいること、また水草も環境により種類が違うことがわかります。

今回、魚の種類は思ったように集まりませんでした。すぐ出かけられるような身近に何か所も「漁場」がある環境は、守って行きたいものですね。今回めぐった用水路も、間近までコンクリート張りや宅地化の波が押し寄せている所がありました。

※ 参加者内訳

1 年生 2 名、2 年生 1 名、3 年生 2 名、4 年生 3 名、6 年生 2 名、  
保護者 7 名（計 17 名）＋スタッフ 4 名

※ 捕れたもの、採れたもの

(玉田) ザリガニ、シマドジョウ、フナ/コオニヤンマ(幼虫)/コカナダモ

(岩崎) カワムツ(婚姻色!)

(板荷せせらぎ付近) アブラハヤ

(板荷吉良堀) アブラハヤ、ウグイ、スナヤツメ/ナガエミクリ、バイカモ

※ 水生生物採集の風景



北小西門に集合



まずは玉田町の田んぼで↑



婚姻色のカワムツ



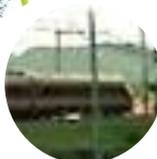
日光市岩崎の田んぼ



カブトムシはおまけ?



↑板荷の田んぼの水路にて  
←水草各種も収穫  
ナガエミクリ↑



板荷の東武線脇の水路  
←金色のスピーシア!

## 奥鬼怒ハイキング

8月14・15日（金・土） 天気・雨のち晴れ

お盆の休みに1泊の宿をとって山上の楽園、鬼怒沼湿原を訪ねるべく東北の奥山に向かいました。お盆に入って以来の天候不順で、霧降高原から大笹牧場は文字通り五里霧中の山越え。栗山に入ると晴れ間も見え、瀬戸合峡で川俣湖を一望のひと休みの後、一般車両が入れる最奥、旧女夫淵温泉（唯一の温泉施設の廃業後、駐車場があるだけ）に車を置きます。県外車も多く奥鬼怒の人気のほどがしのばれます。ここから温泉郷まで川沿いの山道をまず2時間。途中から雨が時折激しく降り、登山は翌日に回すことになりました。やっと着いた八丁の湯、加仁湯（春日野部屋幕下カ土が合宿中）からさらに小1時間、ブナ、トチノキ、カツラなどの巨樹が生い茂る原生林に囲まれた今夜の宿の「手白沢温泉」に到着した時はやれやれで、行程を分けて正解でした。しかし朝が早かったのでまだ昼前、ヤナギランなどが花盛りの宿の庭で持参の昼食を広げ、チェックインのOKが出て小ざれいな部屋に通された後は、温泉に入ったり昼寝したり、なおも降り続く雨音を気にしながら、のんびりと明日のための英気を養います。



翌朝は満を持しての好天、エゾゼミの声に包まれながら昨日通った加仁湯まで下り、さらに奥の日光沢温泉を抜けていよいよ登山道に入ります。さすがに行き会う人は多く、早々と降りて来る人たちも多し中、険しい道を休み休み、例によって道草も頻繁な道中。木立の上に広がる青空を時に仰ぎながらひたすら歩を進めるうち、道は次第になだらかな湿地の中の木道となり、やがて森林がふっと切れて、恐らく標準時間をかなり上回っての鬼怒沼湿原到着となりました。そこは一面ゆるやかな緑色の草原に、一筋の木道と、青空を映した大小の池塘が点在するまさに「山上の別世界」（登山口の案内板の記述）。あいにく花の盛りは過ぎて、種類は多くはありませんが、高層湿原ならではの花々を見つけてはカメラを向けます。360度の展望に、日光白根山や尾瀬燧ヶ岳、会津駒ヶ岳などの姿を見つけます。木道をほどほど進んだところで、ベンチに腰を下ろして、宿で作ってもらった大きなおにぎりでお腹を満腹にして、湿原の向こう端は、尾瀬に向かう道の始まり、いつか辿ることもあるでしょうか。午後もかなり過ぎて、日が傾き始めるのを感じながら、せっせと来た道を引き返します。温泉郷に到着後、さらに女夫淵温泉まで盛んな川音を聞きながらの歩道歩き。次第に足が重く痛くなって来る。その足元もだんだん薄暗くなって来る。

帰りのドライブは夕暮れの出発になり、程なく日が暮れて、漆黒の闇の中の川治湖  
周辺を抜け、往路とは別の鬼怒川温泉を通る明るい道をとりました。新しい道路が出来  
て、思ったより早い帰宅になりました。

### ✿ 参加者

石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計4名）

### ✿ 奥鬼怒行点景



旧女夫瀧温泉（左の川治いにあったが今は土台を残して跡形もない）



奥鬼怒歩道入口



歩道途中の道標



八丁の湯



加仁湯



本日の宿、手白沢温泉



お酒落な夕食にはワインを添えて



盛り沢山の朝食



←やっと着いた湿原入口  
↓→鬼怒沼湿原  
草原と木道と池塘と  
青い空と白い雲



2日目朝は  
絶好の登山日和



湿原の向こう端から  
尾瀬への登山道が始まる  
所要6時間とか

※ 奥鬼怒植物図鑑(山道編)



トチノキの実



タラノキの花



カニコウモリ



ミゾホオズキ



コバノイチャクソウ



ツルリンドウ



ホウキタケの仲間



作り物のようなキノコ!

※ 奥鬼怒植物図鑑(湿原編)



アキノキリンソウ



コケモモ (実)



タヤマリンドウ



イワショウブ (↑↓)



モウセンゴケ



ミタケスゲ



ヒメシャクナゲ



鬼怒沼湿原から見える  
南側の山々  
左、根名草山  
右、奥白根山

## 山口さんの自然講座・1

### 生きている化石メタセコイア

メタセコイアの名前は月報によく出てくるので、カモの足先(鴨脚)に似た葉のイチョウの次はメタセコイア(アケボノスギ)について書こうと考えました。

本種は、スギ科に属するので受粉は風による風媒花であり、花が咲いても目立たないため話題にものぼりません。けれども、生きたメタセコイアの発見には、国を越えた学者の連携があったのです。

日本各地の新生代第三紀層(約6500万年～164万年前)から北米原産のセコイアやヌマスギ(ラクウショウ)に似た化石が発見された。この2種類の葉は互生するが、対生なので明らかに別種だとして大阪市立大学教授の三木茂博士は1942年(昭和16年)にメタセコイアと命名された。メタとは「後の」の意味である。メタセコイアの化石はアメリカからも見つかった。また、セコイアの化石は日本からも発見されていて、三木博士が命名するまではセコイアと混同されていた。

次に小清水卓二博士が語ってくれたことを紹介する。「三木博士は、中国にメタセコイアが生き残っていないか調査に行かれた。1回目は自然がよく残っている四川省のかなり奥地を探されたが発見できず、2回目も同じ四川省で、今回は集落のあるふもとを探索された。このとき中国の植物学者・陳博士が訪ねてこられ、「私は中国の樹木をよく存じていますが、1つだけ分からない樹木があるので見て下さい」というものであった。この樹木は四川省万県(県・日本では村のこと)の磨刀溪にあり、小さな祠に巨大な樹木があって神木とされていた。その樹木はメタセコイアに似ているが、そうとは断定できなかった。それでは、この樹木の苗を日本に送りますから、後で調べて下さいとのことで、苗木が送られてきた。その一部をカリフォルニア大学教授で世界的な古植物学者のチェニー博士に送られた。同博士の返事は、三木博士が命名されたメタセコイアに合致するというものであった。このことでチェニー博士は何度も来日され、協議した結果、メタセコイアの現存種であることが判明した。」というものである。三木博士が中国を調査された同じ頃、1945年(昭和20年)中国・重慶の国民政府が大々的に中国奥地の木材調査をした。その任を受けた北京大の植物学者らもこの樹木が分らず、チェニー博士に尋ねたところ、三木博士に告げたこと

と、その奥地に生育地があるはずで、見なければ分らぬと答えられた。チェニー博士は、自分の目でメタセコイアの自生地を見たかったにちがいない。同博士の中国入りは、大変苦勞されたようだ。そして、四川省の奥地にメタセコイアの自生地が発見された。このほか湖北省にも自生することが分った。絶滅した日本で育つか心配されていたがよく育った。絶滅の原因は何度か襲った氷河時代のような。日本の石炭はメタセコイアである。外国の石炭は、大森林時代と呼ばれた古生代石炭紀(約3億6250万年～2億9000万年前)に栄えていたトクサ類のロボクやヒカゲノカズラ類のリンボクやフウインボクである。日本の石炭とはくらべものにならないほど新しい時代のものだが、外国の石炭と同じ一番質のよい無煙炭である。日本の石炭は少量ずつ埋っているため、そこにかかる圧力が大きいからである。また、この頃までは木材をくさらせる菌類がいなかったため、石炭として残った。

※ メタセコイアの樹高は35メートル、胸高直径2.3メートルになる。鹿沼市のあいりんに、最大とは言えないかも知れないが、大きく育ったメタセコイアが10本前後あったが、切られてしまい数本残っているのみである。

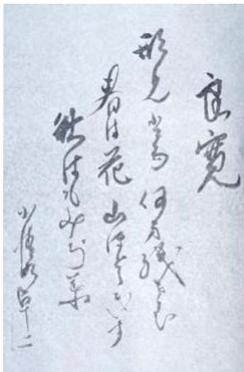
※ 胸高直径…樹木は、地面あたりでは、太くなっているものが多いので、人の胸の高さで測るのがよいとされ、これが直径の基準となっている。(山口龍治)



メタセコイアの化石



メタセコイアの樹形と葉



「形見とて 何か残さむ春は花  
山ほととぎす 秋はもみぢ葉」

良寛さんの辞世で、  
小清水先生が生前特に愛された歌である。

(提供：鍵岡勉氏)

### アオマツムシについて

8月も終わり頃になるとサクラやモミジなどの落葉広葉樹のこずえから「リーッ・リーッ・リーッ」とかん高い鳴き声がきこえてくる。コオロギやキリギリス類は、草むらや地面で鳴くのにに対しアオマツムシは、木の葉を食べるので木の枝など高い場所にいる。

私が鹿沼に来てから数年間は、アオマツムシの声を聞いていない。いつごろ気付いたかは定かではないが、それから数年の間に、爆発的に増えた。他の鳴く虫の声を聞きたくても、やかましくて聞けないほどだ。関西では、1970年代の中頃に近鉄沿線に飛び火したように増えはじめた。

この虫が最初に気付かれたのは1898年(明治31年)9月初旬のころで、植物生理学者の日比野信一氏が従兄と2人で銀座から自宅の麻布への家路の途中で、赤坂の榎坂にさしかかったとき、2本あるエノキの大木の梢あたりで、今まで聞いたことのない虫の声を聞いたのに始まる。当時の参考書にもものっておらず、昆虫学者や鳴く虫を売る人たちも全く知らない昆虫であったので、北海道から上京されていた松村松年先生にお見せしようということになった。松村先生は、いろんな昆虫を手がけておられるが、特に鳴く虫がお好きだということもあった。大正5年9月1日のことである。松村先生は、東京をはなれる2日前から、この虫の鳴き声を東京各地で聞いているが、発見当時は榎坂にしかいなかった。このことから外来種であろうと思われる。のちに松村松年博士はジャワ説、古川晴男博士は熱帯アジア説、中根・石川・青木博士らは熱帯説、野沢登博士は中国大陸説、河田・加藤博士は中国か東アジア説をとなえた。卵は休眠する性質があるので熱帯地方ではないとする学者もいたが、アオマツムシのふるさは中国南部から熱帯アジアにおちついている。名前はキンリュウあるいはアサツユという人もいたが、松村博士が最初に発見した日比野氏に献名して学名は *Madasumma hibinonis* Mat. で和名をアオマツムシと命名された。直翅類の本格的な調査が始まったころである。



アオマツムシ(左からオスとメス)

大阪市立自然史博物館の昆虫研究室におられた故・日浦勇先生は、昭和5年に中国の杭州に滞在されていた。中国大陸のどこかにアオマツムシがいるのだろうかと思っておられた。8月下旬のこと、鳴く虫を売る子供と出会い、どんな虫を売って

いるのか見ると、アオマツムシも売っていたのでおどろいたという。名前は金鍾児(キムゾル)と言っていたようだ。日本への渡来は中国からとは断言できないが、中国にもいることがはっきり分かったと語られた。世界中に広がった生物は、元は、どこにいたかを特定することがむずかしいことの一例である。(山口龍治)

### 山口さんの自然講座・3

#### ヒロヘリアオイラガについて

ヒロヘリアオイラガは、中国南部や東南アジアからインドにかけて広く分布する帰化昆虫であり、熱帯地方ではマンゴーの害虫としても知られている。関西では、1980年代に各地で大発生しているが、私が鹿沼に来たときは、全く見なかったが、奈良へ帰った2013年の夏、花木センターのうら山のモミジの木の幹にマユが3つ付いているのを発見した。その後、月報第29号に成虫の写真が掲載されたので、思ったより早く広がりはじめているようである。というよりも私の行動範囲が狭いので、気付かなかっただけなのかも知れない。

本種はアメリカシロヒトリよりも広食性であり、常緑広葉樹も食べる。その割には、多くの樹木が重なり合っている山中には入り込まず、あるていど空間のある公園樹や街路樹、庭木といった人の生活圏に分布が限られるようである。幼虫の食樹は、アメリカシロヒトリとほぼ同じであるほかカシ類、シイ類などの常緑広葉樹の葉も食する。

これからは、街中の樹木観察会をするときは、イラガの幼虫が付いていないかよく注意するか、厚手の手袋を着用するなどの対策が必要である。ヒロヘリアオイラガの幼虫は食べた木の幹にマユをつくるが、近くに別の木や塀などがあれば、そこでもマユを作ることもある。モミヤヒマラヤスギ、カイヅカイブキ、イチョウの幹にもマユが付いていることがあるが、これらの針葉樹も幼虫が食べているかは疑問である。広葉樹ではユリノキとキョウチクトウだけは食べないようだが、広食性ゆえに、新しい樹木に定着する可能性が極めて高い。天敵が現れるのを願うばかりだ。

マユの写真(右)はふたが開いていて抜け出したあとのものである。マユが完成すると、ぐるっと一周嚙傷を付けていて、外側からは強いが、内側からは開きやすいようになっている。



イラガの毒棘(どっきょく、毒針のこと)は、注射器と同じ構造であるから死んでいても刺される。ヒロヘリアオイラガとアオイラガの幼虫は似ていて、他のイラガ類よりも毒性が強い。どちらも終齢幼虫の尾端部には、別の抜けやすい毒棘がある。これに触れるとヒフに残るので、毛抜きなどでていねいに全部抜かなければ、いつまでも痛みが残るやっかいなものである。

月報第29号の幼虫の写真は、ここにとりあげた2種類のどちらかだと思われる。

ヒロヘリアオイラガの幼虫が好む樹木

ポプラ、ヤナギ類、シナサワグルミ、ヤマモモ、フウ類、サンゴジュ、サクラ類、エンジュ、フジ、シイ・カシ類、ケヤキ、ムクノキ、カツラ、クスノキ、ハナミズキ、カキノキ、モクレン、クスギ、モチノキ類、ナンキンハゼ、ホルトノキ、ムクゲ、ニセアカシア、コブシ、プラタナス類

※ これ以外の樹木にも付くので、載っていないからといって安心しないで下さい。

(山口龍治)



←ヒロヘリアオイラガ(終齢幼虫)

ちなみに成虫はこんな(きれいな)ガ→



第35号12頁に紹介の雲竜溪谷の昆虫のうち、名前の分らないガは「フトオビホソバズメ」でした。山口さんありがとうございました。

予告!

11月3日(祝) 日光、外山尾根探索~内ノ外山へ

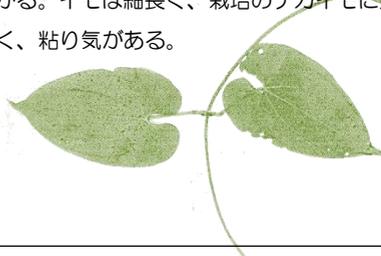
見晴よりP1までは笹藪こぎ。

雲竜溪谷とヒネリギ沢にはさまれたP1からのやせ尾根は

絶景の知られざる名所!



Unique な鹿沼の植物

<p>分布</p> <p>葉の形</p> <p>葉の付き方</p> <p>珠芽（むかご）</p> <p>イモ（担根体・肉質根）</p> <p>別名・品種</p>	<p>ヤマノイモ（学名：Dioscorea japonica）</p> <p>日本・台湾・朝鮮・中国</p> <p>三角状披針形、基部は心形、先は長くとがる。</p> <p>対生</p> <p>葉腋に珠芽がつく</p> <p>毎年新しいイモができて、古いイモの養分を吸収し、より大きなイモを作る。食べられるような大きさのイモになるまで4〜5年かかる。イモは細長く、栽培のナガイモに比べて、きめ細かく、粘り気がある。</p> <p>ジネンジョ</p> 
--	--



ヤマノイモの葉（対生）



雌花とプロペラ状の結実



ヤマノイモのムカゴ

地上部に、花を付けずに子孫を作る、という点で珠芽（しゅが）すなわちムカゴはユニークである。ムカゴがつく植物は他に、ムカゴイラクサ、ムカゴトランオ、ムカゴニンジン、オニユリ等がある。ムカゴは種子のように種皮に包まれておらず、ヤマノイモはイモそのもの、オニユリは球根そのものの形をしている点でおもしろい。単体で増えるから、さし木と同じようにクローンである。つる植物がはびこると、いかにも荒地地といった風景になるし、家の周りにはびこるといかにも無精者の住処と思われるであろう。

私の住んでいる家のとなりは、長いこと空き家で、最近は何年に一度の手入れにも来なくなった。向こう側からはクサギやコムラサキの枝が張り出し、花も咲き、ツタやセ

ナガイモ (学名 : Dioscorea batatas)

中国原産・日本で栽培、時に野生化

葉は厚く三角状披針形、基部は左右にまるく耳状にはりだす

対生

葉腋に珠芽がつく

毎年新しいイモができて、古いイモの養分を吸収し、より大きなイモを作る。食べられるような大きさのイモになるまで4~5年かかる。イモは色々な形のものがある。

ナガイモ (イモが円柱形)

ツクネイモ (イモが塊状)

イチョウイモ・ヤマトイモ (イモが扁平)

総称してヤマイモということがある。

オニドコロ (学名 : Dioscorea tokoro)

日本

円心形~三角状心形、先は長くとがる。

互生

葉腋に珠芽はつかない

横にのびる根茎はあるが、根は肥厚しない。

(肥厚しても苦く有毒)



イモの形と呼び名



左よりながいも (一年いも、とっくりいもなど)  
いちょういも (銀杏いも、物掌いも、やまといもなど)  
つくねいも (大和いも、伊勢いも、丹波やまのいもなど)  
ヤマノイモ : (自然薯 (じねんじょう) など)

参照 : (有) 清和有機生産組合 HP



オニドコロの葉 (互生)

シニンソウ、ヘクソカズラ等のつる植物も広がってきて、花が咲いている。ヤマノイモの花が咲いているな、と思ったら、すでにムカゴも付いている。日光奈良部の黒川あたりに行けばオニドコロがあって、比較するのにいいな、と思っていた。

店の裏庭で仕事をしていると、ハート形の葉が落ちている。どう考えてもオニドコロの葉だ。そいえばさっき、庭の奥からガラクタを引っ張り出して来て、解体作業をやったばかり。それと一緒に、オニドコロのつるが付いて来たのであった。なあんた、こんな身近にあったんだ。

(阿部良司)

前略 『月報第35号』を頂きました夜のニュースではからず前の拙文の“荒ぶる自然”が鹿沼市を襲っていることを聴き、案じつつしたためております。

黒川は活動の中心地ですよね。小藪川も氾濫したとか。やはり御近くですか。自然現象は時にはむごさや哀しさを伴いながら、多くの大事な感情を育ててくれるように思います。例えば阿部様を存じあげなかったら、河川名を視覚が捉えても聞くことにとどまり、聴くには至らなかったでしょう。

阿部様と御仲間の全ての方が御無事なのを祈りつつ。

乱筆乱文にて失礼致します。

草々

9月9日

お見舞いありがとうございます。大芦川、黒川といった大きな川は別として、小藪川、西武子川といったもともと水源流域の狭い河川がどうして氾濫するのか、来月号では鹿沼の河川地図を頭に描いて考えてみたいと思います。私も含め、今回の洪水を未曾有のことと考えている方は多いと思います。しかし、戦前のお生まれの方は昭和22年に襲ったカスリーン台風(※)を思い出されるようです。(阿部良司)

※カスリーン台風…1947年9月に発生し、関東や東北地方に大きな災害をもたらした台風。9月8日未明、マリアナ諸島東方で発生、15日未明から16日にかけて紀伊半島沖から東海地方、関東地方の太平洋岸をかすめ、三陸沖から北東に去っていった。台風そのものは本州接近時にすでに勢力を弱めつつあったが、本州上空に停滞していた秋雨前線に、台風によって南からの湿った空気が供給され前線の活動が活発化、これが9月14日から15日にかけての戦後治水史上に残る大雨(宇都宮で315.3mm)を降らせたと考えられる。この台風による死者1,077名(栃木県361名うち当時の鹿沼町9名)、行方不明者853名(県76)、負傷者1,547名(県546、鹿沼234)。その他、住家損壊9,298棟(県2,249、鹿沼70)、浸水384,743棟(県44,610、鹿沼400)、耕地流失埋没12,927haなど、罹災者は40万人を超え、戦後間もない関東地方を中心に甚大な被害をもたらした。特に群馬県の赤城山麓や栃木県の足利市などにおいては土石流や河川の氾濫が多発し、これらの被害者を中心に上記の栃木県の他、群馬県でも592人の死者を出している。大きな被害が出た要因として、大量の雨がほぼ一日半の短い期間に降ったこと、戦時中や戦後復興の木材消費により山林が荒れ、保水力が低下していた事が挙げられている。

(参照：鹿沼市防災資料、ウィキペディア)

## 会員消息

月報第33号、「会員消息」欄で簡単にふれましたが、今号の「表紙の本」に多くの関連文章及び資料をいただきました山口龍治氏。実は昨年10月から今年4月まで、長きにわたる闘病生活で、奇跡的な生還であったようです。神様からいただいた二度とない命、大切にさせていただきたいと思います。春日大社の太古の杜等、奈良県への自然観察も早いうちに実現したいものですね。ますますのご活躍をお願いいたします。

「アオマツムシ」の文中に登場した上野益三、日浦勇両先生については、追々、表紙の本で紹介していきたいと思います。

### 自然観察クラブ 会費納入のお願い

- |                        |         |
|------------------------|---------|
| ☆ 年会費（個人または家族）         | 1,800 円 |
| // （会報不要または直接取りに来られる方） | 600 円   |

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

#### ☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、  
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

## 愛書家のひとりごと

表紙の本『万葉植物』は上製本（表紙がかたく、開くと背の裏側にトンネルができる本の造り）で本来カバーが付いているはずですが、上製本であつたら箱を付けておいてほしいものですが、上製本カバー付きの本は昭和初期にも結構多かったようです。かつて表紙の本で紹介した尾崎喜八『山の絵本』（昭和10年、朋文堂刊）、中西悟堂『野鳥と共に』（昭和10年、巢林書房刊）もそういう本です。

しかし多くは薄っぺらな紙のカバーなので、あるいは昔の新刊書店で並べてあつた時点で、すでに破られてカバーの付いていない本を買われた人もいるのかもしれませんが。山の本では河口慧海『西蔵旅行記 上下』（明治37年、博文館刊）。この本（上製本）にカバーが付いていたことが確認されたのは最近のことです。パラフィン紙がカバーとして付けられている本もあります。特に昔の文庫本の多くがそうですね。

（阿部良司）

☞ 本号の内容 ☜

活動案内・1	氾濫黒川探検	2
活動案内・2	奥日光、茶ノ木平～半月山ハイキング	3
表紙の本	小清水卓二『万葉植物 写真と解説』	4
活動報告・1	日光・霧降隠れ三滝と大山ハイキング	14
活動報告・2	北光クラブ・サマースクール 水の生き物観察	18
活動報告・3	奥鬼怒ハイキング	20
山口さんの自然講座・1	生きている化石メタセコイア	23
山口さんの自然講座・2	アオマツムシについて	24
山口さんの自然講座・3	ヒロヘリアオイラガについて	26
Unique な鹿沼の植物	ヤマノイモ・ナガイモ・オニドコロ	28
山書談話室		30
おしらせ	会員消息	31
愛書家のひとりごと		31



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第36号

2015年9月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

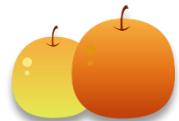
発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

